

書評：ナラティブ・セラピーとその周辺

ナラティブ・セラピー研究会

勝又 正直¹⁾・野村 直樹²⁾・田中 優子³⁾・北川 裕子⁴⁾・勝山 貴美子⁵⁾・
西川 晶子⁶⁾・門間 晶子⁷⁾・浅野 みどり⁸⁾・鈴木 富雄⁹⁾

Book Reviews : Narrative Therapy and Related Literature

The Narrative Therapy Colloquium

KATSUMATA Masanao¹⁾, NOMURA Naoki²⁾, TANAKA Yuko³⁾,
KITAGAWA Hiroko⁴⁾, KATSUYAMA Kimiko⁵⁾, NISHIKAWA Akiko⁶⁾,
KADOMA Akiko⁷⁾, ASANO Midori⁸⁾, SUZUKI Tomio⁹⁾

キーワード：ポストモダン、物語、会話

Key words: postmodern, narrative, conversation

序 章

心理療法の一つの流れに「家族療法」というものがあります。心の問題をかかえたクライアント個人を対象にしての心理療法が行き詰ってしまう時、そうした行き詰まりを打開すべく、そのクライアントが所属する家族全体を心理療法の対象にしようという流れです。そこでは問題をかかえているのは、クライアント個人ではなく、むしろシステムとしての家族であるとされます。個人の

心の問題はその家族が抱えている潜在的な問題が、表に現れたのであるとされるのです。セラピストが、硬直し問題を産み続ける家族内のコミュニケーションに介入して、そのコミュニケーションの流れを変えていくことで、問題を解決していくというのが、その根幹であるようです。

この「家族療法」は「家族看護学」にも影響を与えています。病院という隔離された環境では治癒したと思われる患者が、家族という場に戻ると再発するというケー

-
- 1) 名古屋市立大学看護学部 (社会学)
 - 2) 名古屋市立大学人文社会学部 (文化人類学)
 - 3) 愛知県立看護大学 (老年看護学)
 - 4) (株)INAX 総合サービスヘルシーコミュニティ CoCoka
 - 5) 名古屋大学医学部保健学科 看護学専攻 (基礎看護学)
 - 6) 名古屋大学医学部保健学科 看護学専攻 (臨床看護学)
 - 7) 名古屋市立大学看護学部 (地域看護学)
 - 8) 名古屋大学医学部保健学科 看護学専攻 (発達看護学)
 - 9) 名古屋市立中央高等学校昼間定時制課程
 - 1) Nagoya City University School of Nursing (Sociology)
 - 2) Nagoya City University School of Humanities and Social Sciences (Cultural Anthropology)
 - 3) Aichi Prefectural College of Nursing & Health (Gerontological Nursing)
 - 4) Healthy Community CoCoka, INAX General Service Corporation
 - 5) Nagoya University School of Health Sciences, Department of Nursing (Science Fundamentals of Nursing and Nursing Administration)
 - 6) Nagoya University School of Health Sciences, Department of Nursing (Division of Clinical Nursing)
 - 7) Nagoya City University School of Nursing (Community Health Nursing)
 - 8) Nagoya University School of Health Sciences, Department of Nursing (Family and Child Nursing)
 - 9) Nagoya City Chuo Senior High School, Daytime Division

書評：ナラティブ・セラピーとその周辺

スがしばしば見られます。そのとき看護は患者だけでなく患者をとりまく家族というものに着目せざるをえません。また急性疾患から慢性疾患へと疾患の中心が移行するとともに、医療の中心は病院から地域や家族など生活の場へと移行してきました。看護もそうした日常の生活の場における看護へと重心を移しつつあります。そして当たり前のことでありながら、意識されてこなかったのですが、医療ケアの中心的担い手は、医師でも看護師でもなく、患者をとりまく人々、多くの場合、家族もしくはそれに代わる人々なのです。患者と密接なコミュニケーションを行っているこれらの人々のシステムに関わることが看護の新たな目標になってきたわけです。日本の看護はもともと訪問看護からはじまったのですが、いまようやくそこに戻ってきたというべきでしょうか。

しかし、家族療法では、家族をひとまずコミュニケーションの一つの閉システムであるとみなすことから始まります。しかしそうした家族のシステム（ファースト・オーダー・システム）は治療者との間に新たなコミュニケーションを発生させてしまいます（セカンド・オーダー・システム）。そもそもコミュニケーションを外からあるいは上からのぞき込むということは実は不可能です。そうした観察自体が観察されるコミュニケーションに影響を与えてしまう、すなわち観察者と被観察者との意図せざるコミュニケーションが生まれてしまうからです。すなわちコミュニケーションの外に立つことはできないのです。また人は他人とコミュニケーションすると同時に自分ともコミュニケーションしています。（他人へ話す言葉が自分にも聞こえるという性格こそが、言語の媒介として「声」がもっとも使われるようになった理由かもしれません）。個人は自分への語りのなかで自分というものを固め維持しています。つまり自己への物語によって自己を保持しています。しかもこの自己物語は同時に他者への「物語り」でもあるのです。

こうした人々がもつ「物語」に着目する流れとして、これまでのシステム論的な心理療法に代わるものとして登場してきたのが、「ナラティブ・セラピー」です。

「ナラティブ・セラピー」では人は物語のなかで自己をもっているとみなします。しかししばしばその支配的な物語がその人を痛めつけている場合があります。セラピストは会話によってその硬直した物語からクライアントを解放させ、会話の中でクライアントがみずからにふさわしいのびやかな物語を語っていくことを援助することが目指されるのです。

本学、名古屋市立大学看護学部では、かねてから「ナラティブ・セラピー」に関心を持っていた教員の勝又正直が、日本へのナラティブ・セラピー紹介者である、人文社会学部の野村直樹を招き、さらに学内、学外にも参

加者をつのって、「ナラティブ・セラピー研究会」を発足させました。研究会は2000年11月24日からほぼ月一回のペースで、『ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践』（シーラ・マクナミー、ケネス・J・ガーゲン編、野口裕二・野村直樹訳、金剛出版 1997年）を読み、さらにひきつづき、『ナラティブ・セラピーの実践』（C・ホワイト、D・デンボロウ編、小森康永監訳、金剛出版 2000年）を読んできました。

『ナラティブ・セラピーの実践』もほぼ読み終えたところで、そろそろ「学習会」から「研究会」への脱皮をはかるべく、これまでのおさらいと総括の意味をこめて、ナラティブ・セラピーとその周辺領域の著作をいくつか野村が選び、会員の有志がそれぞれ本を選んで書評することにしました。以下掲載するのはその書評を集めたものです。はっきりとした書式をきめたわけではないので、内容がでこぼこでまとまりの悪いものになっているかもしれませんが、それも参加者の個性の現れと思ってご寛恕（かんじょ）いただきたいと思います。なお序文と各書評をつなぐ部分は勝又が担当し、最後の言葉は野村が担当しました。

ジャン＝フランソワ・リオタール

『ポスト・モダンの条件』（小林康夫訳 風雲社1986）

担当：勝又 正直

この書においてフランスの哲学者リオタールは近代の知の状況を「ポスト・モダン」という言葉でくくって見せています。彼によれば、「ポスト・モダン」とは、近代科学的知（モダン）の正当性の喪失にほかなりません。

もともと科学的知は自らを正当化する「大きな物語」を持っていました。その「大きな物語」とは、具体的には、『精神の弁証法』、意味の解釈学、主体の解放、富の発展など、主体、自由と解放、真理にまつわる物語でした。しかしリオタールによれば、今日はこうした「大きな物語」は失墜したというのです。

たとえば、「大きな物語」の一つであるマルクス主義の後退や公害などがもたらす科学による進歩への懐疑など、「大きな物語」の失墜の例でしょう。ただここで面白いのは、リオタールが「大きな物語」の失墜の原因として科学知のゆきづまりを例証としてあげるのではなく、むしろそうした「大きな物語」が「メタ物語」として、個々さまざまな「物語」の力を奪ってきたそうした過程が、さらに「大きな物語」自身にまで適用された結果、その失墜が起きた、いわば「大きな物語」の「自家中毒」として、この失墜を語っているらしいことです。

もうすこし詳しく言いましょう。この書でリオタールは、メタ物語によって正当化された科学的知と、人々の伝承によって正当化されてきた物語的知を区分しました。

科学知を正当化するメタ物語は、伝承による知を支えてきた物語を一掃します。しかしその作用はみずからをも一掃することになってしまったと彼は考えているようなのです。

ともあれ、いまは科学はその正当性を公然と主張できなくなり、その有用性を主張するだけになりました。リオタールはメタ物語（個別的な物語を統括する物語）による知の正当化はもはや無理と見る。その結果、いまやさまざまな知がその支えるべき物語をうしななってひからびた大地に散乱しているだけという状況になったわけです。

リオタールはこうした状況において、「物語の復権」を主張しようとはしません。おそらく、メタ物語による物語の駆逐の結果としてのポスト・モダンにおいて、それは不可逆的過程を戻ろうとする試みと彼は見ているのでしょう。

この状況を描くのに彼が持ち出してくるのは「言語ゲーム」というヴィドゲンシュタインの考えです。初期ヴィドゲンシュタインは、言語によって構成された像が世界を写す像となっていると考えました。世界と像との「写像関係」と言語世界内部の無矛盾な「論理関係」の二つの関係を彼は想定していました。しかし数学においてはそうした写像関係と論理関係の二分法はありません。数学においてはその論理の世界での展開がそのまま数学世界の構築であり同時に応用でもあります。つまり数体系全体をとらえ、それを世界と対応させるような、上からの超越的な視点というものはないのです。この考えは数学だけでなく、言語の世界においても同様ではないか、というのが、後期ヴィドゲンシュタインの考えの根幹であったようです。つまり、言語の世界でその場、その場で使われる、言葉の使用こそが、その言語世界を構成しているのであって、それを外や上からとらえる言語はない、あってもそれもその言語の世界の一部に飲み込まれてしまう、というわけです。彼はそうした規則に従いつつしかもそれを構成していく遂行の連続を「言語ゲーム」と名付けたようです。

体系をメタレベルでとらえ、それを現実に対応させていく、そうした原理の不在という問題こそ、「メタ物語」の失墜という事態を別の言葉で語ったことにほかならないとリオタールは考えたのです。そこで彼は、ローカルな会話においてその場その場のルールに従って生まれる paralogy（矛盾をはらんだ創造的な論理）すなわち、コンセンサスで必然的に終わることなく考えを出す刺激的な会話によって知は正当化されるとしています。

ここまでくると私には理解不能です。でも単なる「代替物語」の提示によっては今日の状況は乗り越えられないこと、会話のなかでの、さまざまな発言のもつ矛盾、

葛藤、錯綜に創造の可能性を見るということ、この二つの論点を私たちはこの本からくみ取りたいと思うのです。

さてポスト・モダンの思想はまず非西洋近代的な社会との接触がもっとも劇的に現れた人類学において顕著なものとなりました。その一例を次の書から見てみましょう。ここではあえて二人の評者による書評を載せました。読み手によっておなじ本が別の顔をもつということ、これも本論においては重要なポイントであると思われるからです。

ヴィンセント・クラパンザーノ

『精霊と結婚した男—モロッコ人トゥハーミの肖像』
(大塚和夫・渡部重行訳 紀伊國屋書店 1991)

担当：田中 優子

この民族誌は、著者である研究者が人類学者として、そして「治療者」として、トゥハーミとの出会いの物語を叙述した "TUHAMI: Portrait of a Moroccan" (The University of Chicago Press; 1980) の全訳であり、「文化人類学」叢書の一冊として刊行されている。精神分析論の影響を受けた著者が、トゥハーミという「個人」を焦点に、彼の「語り」を分析的に叙述する手法で構成した点が特徴的な書である。

「本書は一つの実験である」という書き出しは、これから始まる著者の挑戦を暗示させてくれる。そして、何への挑戦なのか？ 全てを読み終えて、その挑戦は著者が自分自身に向けた挑戦だけでなく、読者（つまり私自身）にも向けられていると気づく。

本書において最大のテーマとなっているのは、ラクダの足を持つ女性の魔物、アイシャ・カンディーシャと結婚し、彼女に支配されているトゥハーミの結婚生活である。そして、トゥハーミだけが特別なのではなく、アイシャ・カンディーシャやその他の魔物が多くのモロッコ人に果たす役割が、モロッコ世界で容認されているという事実が中心となっている。この未知なるフィールドにおいて著者は、調査助手の通訳を介してトゥハーミと語り、細心の注意を払ってトゥハーミの語る言葉を、その言葉がもつ意味も含めて描写している。

他者（対象）を知りたいという欲求は、具体的には他者（対象）の「語り」—そこには言語的なものだけではなく、象徴的なものも含まれるが—に耳を傾ける行為で満たされる場合がある。しかし、そこで得られる「語り」に対し、聴き手はフィルターをできるだけ少なくして解釈できているのか？ 換言すると、他者の「語り」をその人が「生きている世界観」の範疇でどれだけ誠実に聴くことができているのか？ という課題がそこには存在している。この、人の語りを「聴く」こと、「書く」

書評：ナラティヴ・セラピーとその周辺

ことへの挑戦を、本書を構成する過程において筆者自身が自ら挑み、そして本書を通じて読者である私たちにも挑戦しているのである。

クラパンザーノが挑戦している「語り」の叙述は、これまでのライフ・ヒストリーやケース・ヒストリーとは性質が異なり、内部から異文化を眺望するためにのみ用いられているわけではない。トゥハーミと研究者である著者との出会いという相互作用のなかで創出される経験の物語が、トゥハーミ独自のイデオロムではどのように表現されるのかという視座で、人の語り中存在する“象徴的なものとの出会い”の中から、人の生きる姿が、異文化間では互いの想像をはるかに超える形で表出する様相を叙述しているのである。そしてその経験が、言葉の使い方なども含め、著者が一人の研究者として、「自分自身」を眺める契機になったことについても描かれているのである。

ここで語られるトゥハーミの物語には、伝統的モロッコ社会のヒエラルキー、権威パターン、宗教観と密接に絡み合った父方・母方の人物像、男と女、性的関係、兄弟、主人と従者との関係や態度などが巧みに絡み合い、さらに彼の「言葉づかい」や「象徴」からは、異国文化の風習、慣習を通じての「病いを含めた人間の語り」が見え隠れする。その奇妙な、エキゾチックなトゥハーミの「語り」は、読者を混乱の渦に巻き込んでいく。そして、その混乱の正体も掴めないままに「語り」は続いていくのである。それは、フィールドワークの過程で著者自身が混乱の渦に巻き込まれた体験を、読者にも提供されるよう綿密に、本書の構成が仕込まれているからである。

混乱が緩和されはじめるのは、クラパンザーノのいう「個人史的現実」と「自伝的真実」の区別が読者にもはっきりしたときである。つまり、トゥハーミにとって真実は、現実起こった個人史の中ではなく、現実起こらなかった自伝的物語の中にこそあったのだ、と気づいたときである。そして、混乱が解消した代償としてやってきたのは、ずっしりと重く、表現しがたい「心の痛み、悲しみ、苦しみ」のようなものだったのである。その重みは、人の人生に関わることへの重み、あるいは「病いをもつ人」の心の重さ、もしくは「病い」そのものの重さなのかもしれない。明確にはわからないが「病いへの苦悩」とでもいうものが、人間には普遍的に存在すること、そして文化的差異は、これほどにその表出方法を変えてしまうものなのだというをあらためて痛感させてくれた。しかし、看護学にたずさわる私には、本書で叙述される“トゥハーミの語る姿”からは、決して重苦しさを感じないのである。彼は、「病い」を実感していないのではないかと思わせるほど、自らのことを

淡々と語るに過ぎず、従って、本書はこれまでの闘病記などにある「病い」を持つことへの悲痛さや、「病い」を持つ語り手の姿から激励を受けるといった類の叙述とは異なり、とにかく神秘的で、不思議な空間へ案内してくれる一書なのである。

著者は、彼にとってジンメル、象徴人類学者、ラカンらの影響がモロッコ文化との出会いに理論的空間を提供してくれたと述べている。それは、自らへの挑戦として、トゥハーミの「語り」に意図的に自己を登場させるという試みによって表現されているのかもしれない。自分自身もその対話者として登場し、自分自身の語りを含めて彼を理解しようとした。そして、自分自身の語りを見つめなおすことで自分が持っていた先入観や、恣意性にあらためて気づきを得ている。だからこそ、他者を理解しようとする行為の過程で知った「自己」についての経験を、民族誌を「書く」という作業の中で読者に伝えようと挑戦したのである。そして私は、「人の語りを聴く」ということへの姿勢、つまりは語り手の「現実的」なものだけでなく、「真実」に心を傾けるということと、それらの「真実」を表現する手法について問いかけられたと感じたのである。

ヴィンセント・クラパンザーノ

『精霊と結婚した男—モロッコ人トゥハーミの肖像』

(大塚和夫・渡部重行訳 紀伊國屋書店 1991)

担当：北川 裕子

本を読み終えて、表紙を閉じた。長い余韻から覚めて、ふと考える。

私が今読んだ物語は、はたして、誰の物語だったろうか。

タイトルにあるとおり、これはトゥハーミというアラブ系モロッコ人のライフヒストリーである。彼は40代半ばの文盲のかわら職人であり、モロッコのメクネスにある工場の、窓のない物置小屋に住む。彼はラクダの足をもつ女の精霊、アイシャ・カンディーシャと「結婚」しており、彼女に日常生活のさまざまな面を支配されているのだという。運命という力の前で哀しいほどに受動的な彼の、性と迷信に満ちあふれたアラビアン・ナイト風の語りや延々と続く。死、来世観、割礼、性交、風俗、習慣、儀礼、などのモロッコ文化に関する事項が彼の生活史を通じて浮かび上がってくる。

そして「本書は一つの実験である。」から始まるこの本は、トゥハーミとの「民族誌的出会い」から別れまでを描いた、文化人類学者クラパンザーノの物語でもある。彼の言う「実験」の目的とは、「民族誌を書くことと、それを読むことに疑いもなく従事している際に感じている自己満足にショックを与えること」である。そして、

私という読者に関して言えば、彼の「実験」はおおいに成功をおさめた。「自分自身の語りを通して自分の先入観は明らかにされるはずである。」という言葉に、私はものの見事にショックを与えられたのである。

看護にたずさわる人間の一人として、これまで対象を理解することに心血を注いできたつもりだった。けれどもその対象を理解する過程で不可欠な媒体となる自分というものの存在を意識していただろうか。また、自分が今まで誰かや何かに関して書いたり読んだりしてきたことは、いったい何だったのか。例えば、インタビューの際には、話し手の横に聞き手が存在していたことは間違いないはずなのに、記録する時点で聞き手の存在がその場面から抹消されていたことに注意を払っていただろうか？聞き手によって記録されたものを、話し手の独白として何の疑いもなく読んでいなかったか？そこに描かれていたものは、話し手だったのか、それとも話し手という鏡に映し出された聞き手の姿だったのか？やむことなく降り続ける疑問符の雨にたたられる結果となった。

はじめはトゥハーミの語りの間にこま切れに登場し、淡々と解説していた著者クラバンザーノ。だが彼は次第にトゥハーミの対話者としてしばしば章のなかに姿を現し、そこで苦悩し、その思いを語るようになる。そしてインタビュアーとしての枠をこえ、トゥハーミに夢について予言したり、しまいには、現実的なものを強調する目的でトゥハーミに実際の生活を話させる「治療者」となったことを自ら宣言する。そこには物語が語り手と聞き手の間で織り上げられていく様子が、絵巻物のように目に見えるかたちで描かれており、読み手は両者の行く末を見守るべく、さらに物語の奥深くに引き込まれてゆくのである。

一息ついて、一度は閉じたこの本のページを、どこというのでもなくまた開いてみる。開いたページの上に整然と並ぶ文字を眺めながら、考える。

インタビューにおける「真実」とはいったい何だろうか。

この本を読むことで、私は自分の過去におけるさまざまな対話の場面を振り返る機会を与えられた。そしてあの場面で起きていたのは、このことだったのだ、と思われることがいくつも浮かんできた。

語りの中には、想像的なものと現実的なものがある。私たちは現実的なものの中のみ真実を見出すことができると考えがちである。けれどトゥハーミにとって聖者が夢の中で啓示することも真実であるように、真実とは、想像的なものと現実的なもののどちらの中にも存在する。むしろ想像的なもの、現実的なものと安易に区別してしまうことのほうが、クラバンザーノのいうところの「自伝的真実」、つまりその人の生の核心をなす出来事の

「運命的瞬間」を見逃してしまう危険性が高いのではないだろうか。これまで、ある出来事について、現実起きたことを客観的に伝えるということにこだわりすぎていなかっただろうか。私は大いに反省した。

また、フィールドワークを終えたクラバンザーノの旅立ちという現実が、インタビューの中での別離、死、去勢、遺棄などのテーマに知らず知らずのうちに反映されていたように、「現実的なもの、想像的なものと同様に隠喩的な機能を果たしうる。」ということは、現実的なものをそのように考えたことがなかった私にとって、新鮮で、かつ納得させられるものであった。

過去の対話の中で—それは看護の場面におけるクライアントとの対話であったり、実習指導の場面における学生との対話であったりするのだが—同じひとつの話題について話しあっているはずなのに、どうも互いの言うことがしっくりこないと感じたことがあった。あの違和感は、クラバンザーノが述べている対話者双方の関心の違い、すなわち情報伝達の言語と感情的喚起的言語という「相互に理解不可能な言語を話していた」ことから生じたものだったのかもしれないということに気づかされた。

この本からさまざまな示唆を与えられたこと、そしてトゥハーミとクラバンザーノとのやりとりと、彼らとはこれほど住む世界の違う、私とその周辺の人とのやりとりとの間に、これほど多くの類似性を見出すことができたことに素直に感激した。

さて、「物語」という考えを受け、それを医療の場面で展開している著作をみてみましょう。

A・クラインマン

『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』

(江口重幸・五木田紳・上野豪志訳 誠心書房 1996)

担当：勝山貴美子・西川 晶子

長く続いた感染症の時代、急性期疾患の時代が過ぎ去り、現在は、慢性疾患の時代であると言われている。生物医学的モデル（バイオメディカルモデル）の時代から、エコロジカルモデルの時代へと変化している。いままでのような疾病（disease）の治療の時代から病い（illness）の治療の時代へと移っているといえる。A.クラインマンは、「病い」という用語を「疾病」という用語とは根本的に異なった意味として使用し、「病いは症状や患うことの経験である」という。本書は、精神科医であり、ハーバード大学の社会医学科で医療人類学の主任教授を務める著者が、「病い」は多義的で、その意味は重層性であることを実例をあげ、説明モデルを用い、いきいきと描き出している。患者や家族の語りを通し、「病い」の意味を引き出し、再構成し、エスノグラフィー

書評：ナラティブ・セラピーとその周辺

の手法を用いて分析しているのである。私たちが忘れてちになっていた、重層的で多面的な「病い」に対する「ケア」の意味をもう一度考える機会を与えてくれる本であり、医療人類学の方法をめぐる最良の入門書といえる。本書の構成は、冒頭の2章で理論的な枠組みが展開され、第3章～第13章で具体的な事例を通して「病い」の意味を患者と治療者がどのように作り上げ、説明しているのかを描き出し、第14、15、16章で、治療者たちへ焦点をあて、医学教育と医学実践のためのメッセージを示している。

I 本書の理論的な枠組み（第1章、第2章）

1. 「病い」の意味

A・クライマンは、「病い」の意味を、①症状自体の表面的な意味、②文化的に際立った特徴を持つ意味、③個人的な経験に基づく意味、④病いを説明しようとして生じる意味、の4つを説明している。そして「病い」の意味の重層性を「患者は彼らの病いの経験を、つまり自分自身や重要な他者にとってそれが持つ意味を、個人的なナラティブとして整理するのである。病いのナラティブは患者が語り、重要な他者が語りなおすストーリーであり、患うことに特徴的な出来事やその長期にわたる経過を首尾一貫するものにする」としている。つまり、語ることによって病いをめぐる様々な出来事や経験や意味が整理され配列されて、一つのまとまりを持つようになる。病いの意味は、与えられる意味であると同時に、創り出されるものでもあるといえる。文化的表象、個人的経験、集合的経験（社会経験）といった様々な源泉を背景に持つ意味が取捨選択されて、一つの物語が構成される。そして、このような物語こそが、個々の経験に具体的な輪郭を与える枠組みとなる。それらの枠組みをどのように読み解いていったらよいかを、具体的な事例を通して、説明モデルとして解説している。

2. 「説明モデル」とは

「説明モデル」とは、「患者や家族が、ある特定の病いのエピソードについていただく考え」である。この説明モデルを引き出すことで、「この病いの本質は何か」「患者がケアから何をほしいか」「なぜ、患者はその病気におかされてしまったのか」など「患者や家族にとって何が危険にさらされているのか」を明らかにすることができる。

II 具体的事象における「病い」の意味

（第3章～第13章）

著者は、慢性の病いの経験を理解するうえで、その中心になる意味は「喪失」であり、慢性の障害では共通の重

要性をもつという。数章にわたって紹介された事例は、患者の心の中に広がる羞恥心や苦痛や怒りや絶望などの感情が、慢性の病いの経験を構成する要素として生活経験全般や病いそれ自体に、そしてケアの反応に影響を及ぼすことをまざまざと描いている。慢性の病いをもつ人々の苦悩が、多義的であり、多声的であり、複数の意味をもつということを私たち臨床家に改めて問いかけるのである。

III 慢性の病いを持つ患者をケアするためのひとつの方法 （第14章～第16章）

A・クライマンは、慢性の病いを持つ患者のケアにおける多くの治療者－患者関係は、二つの異なった経験のぶつかり合いだとしている。彼らが経験する二つの異なった様式について語っているからである。だからこそ、治療者は患者を知ろうとしなければならない。そのための方法として、いままでのような生物医学的な手法だけではなく、微小民族誌（ミニエスノグラフィ）の必要性をあげている。第一段階として、患者の病いの経験を引き出すような質問をし、患者の語りを再構成すること。この際、病いを上記の4つの視点で理解しようとし、病者の世界に入り込み、患者の話を厚みのあるものにし、患うという経験に対する臨床医の理解を深める。そして、病いとその治療に関連した現在の主要な心理・社会的諸問題を記録し、生物医学的なリストと調和をとり、適切な治療を一層体系的に行うための手段として用いるのである。前にも述べたが、治療者－患者関係は二つの異なった経験のぶつかり合いである。治療者は、経験に基づいた専門家としての先入観や関心、情動などに振り回されず、患者の病いの経験という現象にできるだけ近づける努力を惜しまず、また、いつも自分自身の治療方法を点検できる力をつけていくことが本来のケアを行うために必要だということ私達に伝えているのである。

本書は、病者の生きる経験に敬意を表すことを強調しつつ、病者と治療者の双方向的なケアをめざしている。臨床家や臨床研究者が、情報化や価値観の多様化のすすむなかで、今後、高齢化に伴ってますます慢性病者が増加していこう社会に対応するためには、必読の書となるはずである。

M・ホワイト&D・エプストン『物語としての家族』

(小森康永訳 金剛出版 1992)

担当：門間 晶子・浅野みどり

ユニークな人々の出会いと文学の癒し

この本の原題は“Narrative Means to Therapeutic Ends”であるが、ナラティブ・セラピーに関する多くの本が出版されている現在、既に「古典」の領域に属するかも知れない。これはユニークな二人の出会いから生まれた本である。著者のひとりオーストラリアのソーシャルワーカーで、病院の勤務経験から問題の「外在化」を思いついたM.ホワイト。そしてもう一人は、ニュージーランドの文化人類学者でありセラピストでもあるD.エプストン。(われわれ評者はこの本を手にする前すでに研究会で彼らの実践と出会っていた。それは「ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践」¹⁾の中の「書きかえ療法」という章であった。)「治療に来る意志のない人を参加させるための招待状」など、「手紙」を用いたアプローチの実際が、この本には数多く登場する。特にわれわれの印象に残ったのは、家族の中である役割をとり続けてきた人に対し、その役割への未練に変化をもたらすために書いた手紙だった。著者らは自らの実践を「様々な問題に対する文学的手法」と表現している。

「ストーリー、知、そして力」と題された第1章は、社会理論の最新の動向と、それらが知らず知らずのうちに治療に与える影響について述べている。M.フーコーの力と知についての考えやテキスト・アナロジーを用いて解説しているのだが、読み進むにはかなり手こずった。著者らは気を利かしてか、第2章から読み始めることも提案している。

問題の外在化から物語が生まれるまで

第2章は「問題の外在化」と題されている。問題をもっている(とされる)人は、「問題のしみこんだ描写」の中にどっぷり浸かっているため、その筋書きと矛盾する事柄にはなかなか気づくことができない。ここでは、今まで無視されて来たこのような事実(ユニークな結果)に光が当てられる。その際、セラピストからクライアントに発せられる「特別な質問」はいったい何がポイントになるのか。また、何が大事にされるのか。それは、一般論よりも自分の経験のユニークさに、また専門家の定義よりもクライアントの定義に、光を当てた表現だと言える。セラピストに限らず、専門家と呼ばれる私たちはクライアントが口にするユニークな体験を、「つまりは〇〇ということですか？」と一般的な表現に言い換え、自分の理解の枠に収めることで、知らず知らず職業的安定を得てきたのではないかと反省せずにはいられない。

「ストーリーだてる治療」と題された第3章では、「論理科学モード」と「物語モード」との比較が興味深い。言語や会話の目的や性質、また観察者と被験者の意味が、論理科学モードと物語モードの2つの立場では、いかに異なると考えられるかが説明されている。評者のひとり、患者や家族、地域住民との関わりの中で、会話を既成の枠の中で理解しようとするあまり、調査者としての自分の位置がわからなくなることがあった。例えば、育児サークルの記録をとり続けている中で、会話がどの方向に進むのかついまとめたくなったり、「観察者」という自分の位置に居心地の悪さを感じたりすることもしばしばだった。しかし、この本を読み進むうちに、堂々と巻き込まれて、ストーリーと一緒に作り上げていけばいいのだと励まされる。後半に「説明」と「ストーリー」との対比が述べられているが、私たちはこれまで「説明」を求めすぎたり、重視しすぎてきたのではないかと思える。その人の「ストーリー」をもっと深く知り、それからもっと多くを学ぶことが出来たのではないだろうか。

第2章、第3章とも多くの事例をとおして、人が自分の人生や人間関係における「強み」に気づいていく過程が描かれている。しかし、そのストーリー全体の背景、セラピー全体の流れ(治療者の物語も含め)を十分に味わうことはできなかった。その理由はおそらく、「問題の外在化」や「ストーリーだてる治療」の過程やその手法に沿って、事例のある部分だけを取り上げられていることによるのだろう。ジグソーパズルの1ピースのような家族の物語の「断片」だけではわからない、満足できない、という不満が残ったのかも知れない。

物語的説明がもたらすもの

第4章は「対抗文書」と題されている。難治喘息の少年の事例が、セラピストから出された「手紙」を並べることによって説明されていて、大変興味深く読めた。まさに私たち看護者が日頃よく出会う、「手におえなくてこずり」関わり方に試行錯誤している例そのものである。科学的説明では解決に結びつかない問題が、物語的説明をおびることでクライアントの力になることができる、そのいい例と言える。「ストーリー」は全てをひっくるめた(inclusiveな)傾向をもつため、人生の出来事を豊かにするが、「説明」は排他的(exclusive)であるため、ある範囲を越えた出来事は無視する傾向をもつ。慢性疾患をもつ人々の長い療養生活を例にとってみても、それは疾病と向き合うだけの人生ではないはずだ。

「書く人」と「書かれる人」を文書の中でこれまでどう示してきたかに対しても、著者らは鋭い批判の目を向ける。「書き手」と「当事者」を示さない文書がいかにその人の個性を排除し、患者の言葉や経験の豊かさを無

書評：ナラティブ・セラピーとその周辺

視して「公用語」（例えばカルテに記載されたような）に転写してきたか。患者や家族、住民、あるいは学生について記述するとき、私たちは書き手としての自分をどう表現してきたのだろうか。どんな立場で、誰に向かってそれらの人々のことを記述してきたのだろうか。

これに対する著者らのアプローチはこうである。つまり、多くの読者が聴衆となれる新しいストーリーの上演、そういう力を持つ物語の作成である。ある夫婦の面接経過を「手紙」で説明した後、著者のひとりのホワイトはこう述べる。「ですから、あなた方読者は、ディックとマリーンの新しい意味の上演と新しいストーリーの表現のための聴衆として集められているのです」と。読者である私たちが、聴衆として重要な役割を担ってここにいるのだ、と気づかされる。

文 献

- 1) D.エプストン, M.ホワイト:書きかえ療法, ナラティブ・セラピー (S・マクナミー, K・J・ガーゲン編/野口裕二, 野村直樹訳), 139-182, 金剛出版, 東京, 1998.

J・ウィンスレイド, G・モンク

『新しいスクール・カウンセリング』

—学校におけるナラティブ・アプローチ—

(小森康永訳 金剛出版 1999年)

担当:鈴木 富雄

現在、評者の勤務する学校はもちろん、多くの学校で「問題の生徒」「不登校の生徒」「出来の悪い生徒」などと、生徒へのさまざまなレッテル貼りが行われている。そのレッテルが、貼られた生徒への問題解決に役立てばいいのだが、往々にして、教師の生徒への固定的な見方を強固にしていく役割しか持たず、その生徒がたとえ必死に再生への努力をしたとしても、その努力はまったく無視されるか、ほとんど認められずに見過ごされてしまう。その結果、生徒も、自分をレッテルを貼られた通りの人間とみなし、「どうせ、何をやっても無駄だから」というあきらめの境地に自分を追いやってしまう。そうした学校の言説（「言説」とは、私たちが聞いたり繰り返したりしている話の中に生きている社会現象なのである。本書53ページ）を覆し、生徒自らが自分の生を主体的に選び取っていく手がかりが、本書には随所に散りばめられている。

本書の構成は、現場で日々悪戦苦闘しているカウンセラーや教師に、理解しやすくなっている。第1章「ナラティブ・カウンセリングって何？」で、学校現場での事例をカウンセラーのロンと「トラブルメーカー」という評判を立てられている学生アランのやりとりを紹介す

る形で描き、第2章「ナラティブ・カウンセリング—ステップ・バイ・ステップ・ガイド—」では、語り方の例などが細かく紹介されながらナラティブ・カウンセリングの手法が、箇条書きで紹介されていく。

例えば、本書72ページにある「学校でよくみる問題についての外在化法による語り方の例」では、「『先生が君に大声を上げると、どんな風を感じるの?』という代わりに、『とすると、怒りが先生に君に向けて大声を上げさせたわけだ。それで、君は何をさせられたの?』とすることができる。」などのように異化された語り方の例が、具体的にいくつも紹介されている。子どもたちと接する中で、こうした語りをカウンセラーや教師が身につける必要性は、分かっていたものの、実際どんな会話をすればいいのか分からなかった者として、これらの具体的な会話例は大変参考になった。（ただ、現場でとっさにこうした会話ができるには訓練が必要だと思われるが。）

第3章「評判に取り組み直す」では、評者も冒頭で述べた学校言説における欠損言語の内在化をナラティブの手法によって再記述していく必要性が述べられる。

そして本書のポイントである再記述の過程—学校の権威とトラブルを抱えた若者とどのように仕事をするか—というところが第4章「『トラブルにある』子どもとの会話」で述べられていく。盗み癖や虐待行動や怠学など問題行動ありと記述された学生とカウンセラーとのやり取りの具体的な叙述は、学校現場で働く評者にもリアルな描写として読むことができた。

特に、日本のスクールカウンセリングといえば、学校の権威的な生徒指導と一体となったものか、あるいは極力不登校などの内的な問題を抱えた生徒だけを限定したカウンセリングが多い中で、本書では、規律・訓練の問題においてもナラティブ・アプローチの手法を身につけたカウンセラーが有益な役割を果たすことが可能だという立場に立っている。そこで言われている規律・訓練とは、抑圧的・矯正的なそれではなく、ポジティブな意味での規律・訓練を考えている。これは、生徒におもねるのでもなく学校の権威に従うのでもない、もう1つありえるストーリーに向けて脱構築していく（ドミナントなストーリーからオルタナティブ・ストーリーへ転換する）新しい問題の捉え方として重要な視点である。

さらに、本書の特徴として挙げられるのが、個人を越えたナラティブ・カウンセリングのアプローチを述べた第5章「グループ、クラス、それにコミュニティともナラティブなやり方で仕事をする—個人への焦点を越えて—」である。通常、カウンセリングと言えば、カウンセラーとクライアントの1対1の関係か、あるいは家族を交えたものか、グループカウンセリングを考えるのであるが、

ここでは、学校というコミュニティそのものに対してのナラティブ・アプローチまで言及している。学校が、ナラティブな雰囲気でもち始めたら、「生徒は、あたかも生まれながらの怠け者だとか乱暴者などとは記述されなくなるだろう。」「教師は、自分たちの方がよくものごとを知っていると自動的に仮定するのではなく、純粋に子どもたちから学ぶことに興味をもつだろう。」「学校は、学校の中で作用しているドミナント・ストーリーを脱構築する会話を奨励するだろう。」「学校で問題が関心を集める時はいつでも、問題はストーリー、あるいは現実のひとつの構成物として考えられるだろう。そして、その他にあり得る構成物が、慎重に探し求められるだろう。ストーリー立てられなかった経験こそが、高い価値を与えられるだろう。多様な視点がコミュニティを豊かにするものと考えられるだろう。」

それは、希望的観測に過ぎないと考える読者を予想してか、筆者は本書の最後の方で次のように述べる。「これらは、理想的な夢に聞こえるかもしれない。実現不能とシニカルな見方をすることもできる。私たちは、ジョン・レノンの言葉を引用にするに留めよう。『人はぼくを夢想家だと言うかもしれないけど、それは、僕ひとりじゃないんだよ。』」

あ と が き

ここに書評として挙げる5冊の本は、いずれもナラティブの視点とポストモダンの価値観を研究のかたちで著したものです。今回私たちの「ナラティブ研究会」で候補に挙げた12冊のうちの5冊ですが、このいくつかはすでに古典といわれる名作です。短いあとがきを書くにあたって、最初に「ナラティブ」と「ポストモダン」という2つのキーワードについて、ほんのすこし補足したいと思えます。まず、「ナラティブ・セラピー」から「ナラティブ」という言葉をよく耳にするようになりましたが、それにはふたつ意味があると思えます。それは(1)出来上がったストーリーとしての「物語」という意味と、(2)いまここで声に出して「ものがたっている」という意味のふたつです。「ナラティブ・セラピー」はそれゆえ「物語療法」と言ってしまうとすこし足りないでしょう。もっとコミュニケーション的、会話的要素を強くもっている、と云えると思えます。そして、もうひとつの「ポストモダン」という言葉ですが、これは「モダン」(例、科学のストーリー、理念)の否定あるいは排除というふう捉えられがちですが、そうではなく、むしろ異なり矛盾しあう物語の共存を認める知的強靱さのことを指している、と言ったほうが正確だと思えます。つまり一方が他方を駆逐するというのではなく、科学の物語も数ある中の

ひとつの物語形式として認めていくという知的空間の創造をポストモダンと呼んでいます。

さて、リオタールの著作『ポスト・モダンの条件』ですが、科学の知を物語の知と対比してみせたことで、社会科学の広い領域に影響を与えたと言われます。ぼくにはこの哲学書を十分精察する力はありませんが、この本の言う「大きな物語の失墜」とそのあとに来る「小さなローカルな物語群の出現」は、時代の大きな理論的枠組によって人々の会話が左右されがちな臨床の分野においてとくに、新しい道しるべとなることを予感させます。はなしを、専門的なものも含め、すべて「同一化へと回収してしまうような論理」、これこそ「大きな物語」のもつ機能ですが、これに対する説得力ある反論と云えるでしょう。

フィールドワークに軸をおく文化人類学は、臨床の分野と多く通じるものをもっていますが、文化人類学がポストモダンの大波に洗われた(さらわれた?)のは、もっと以前つまり1970年代後半から80年代にかけてです。現地調査のあり方とその報告書(民族誌ことエスノグラフィー)の書き方において、アメリカ人類学は根底からその再考を迫られました。クラバンザーノの著作『精霊と結婚した男—モロッコ人トゥハーミの肖像』は、この領域での緊張感を最もリアルに語ってみせた民族誌の古典で、他分野の人が読んでもたいへん衝撃を受ける名作のひとつです。歴史的にみて事実ではなくても、語りの中には人生の真実があると気づいていく過程が、イスラームの文化とモロッコ人の土着信仰をとおして炙り出されていくとき、読者はそこに調査者クラバンザーノの姿に自分自身の影をかさねて見はじめるだろう、とそんな気がします。

異国の文化を理解しようとする同じ目線で、慢性の病いをもつ人々への接近をこころみたくラインマンの『病いの語り』は、「臨床人類学」とその副題にうたっており、文化人類学の医療現場へのみごとな応用と言えます。「疾病」の側面は医学の範疇であっても、その慢性の病気を生きるという側面、つまり「病い」の側面については、患者の内側からの「説明モデル」に頼らなければならない。でも「医学はそれを記述する方法をこれまでもっていなかった」と、この本の訳者のひとり、江口重幸さんがどこかで言うように、患者の語りからその人に関する「小さなエスノグラフィー」を書いていくことの重要性が説かれています。また病む人々だけでなく、医療者の内側にも目を向けていることをみても、フィールドワークの方法論を熟知してのことでしょう。医療人類学という分野が、ナラティブ(あるいは解釈学)と出会ってこのような臨床人類学が出来上がってきたような気がします。

書評：ナラティブ・セラピーとその周辺

サイコセラピーの領域で、「ナラティブ」という語が一般的になったきっかけが、ホワイトとエプストンの著した『物語としての家族』にあると言っていいでしょう。書評にもあるとおり、原題の中に、“Narrative Means”という言い方が入っています。「外在化」という考え方と手紙を使ってクライアントの「ストーリーを書き換える」という治療スタイルは、それまでの家族療法のキーワードが「システム」だったことを思い出すと、とても斬新なものです。そこで「システム」に対して「ナラティブ」が、一種新たな対抗概念であるかのように（そうではないのですが）出てきたという経緯があります。これについては逸話があって、著者らははじめアメリカの出版社にやや違う題名で提出したところ、出版社のほうが、上のように“Narrative”と直したらどうか、と言ってきたそうです。最後のウィンスレイドとモンク著の『新しいスクール・カウンセリング』は、この方法論の教育現場での応用について書かれた新しい本です。ホワイトとエプストンのナラティブ・セラピーは、ソーシャルワークのあらゆる方面に応用可能というすばらしさがあると思います。

（受稿 平成14年10月10日）

（受理 平成14年11月19日）